

A Proposal on Old Sister Houses in Taiwan and Niigata

小宮山智志¹

要旨

日本の古民家を台湾に移築する事業と、日本において地域のボランティアで支えられている古民家間において主催者・観覧者の相互交流を行い、さらなる観覧者数増加を目指すこと（“姉妹古民家”）を提案する。

地域外部のボランティアのネットワークを広げていくことで、多様な価値観・視点をもった人々が協力することで新しい価値を生み出す（弱い紐帯の強み[1]）。“姉妹古民家”はボランティアの交流による新しい価値（物語）が付与されることで、既存の相互の観覧者に加え、新規の観覧者増が期待される。

キーワード：国際観光，新潟，豪農の館，弱い紐帯の強み

1. 目的

日本の古民家を台湾に移築する事業が行われている。これらの古民家と、日本において地域のボランティアで支えられている古民家間で主催者・観覧者の相互交流によって、さらなる観覧者数増加・古民家の維持を目指す“姉妹古民家”をここに提案する。

台湾移築事業が日台のボランティアによってなされている。また基本的に公的支援を受けていない、多くの日本の地主遺構の保存にも、所有者のみならず地域のボランティアの力が重要となる。10年前からボランティアによる保全活動が行われている先進的事例（新潟市西区赤塚：中原邸）と台湾移築事業の相互協力の可能性を検討することを、本稿の目的とする。

本稿では日本の古民家の台湾の移築事業、次に日本における古民家保存事例をそれぞれについて紹介し、最後に“姉妹古民家”の検討を行うが、その前に本節では台湾における日本建築遺構の観覧の事情について述べておきたい。台湾では日本建築の保存の気運が高まっており、保存が進められ、また台湾の人々にとって、観光の



図 1 新北投オープニングセレモニー
(撮影：筆者)

¹KOMIYAMA, Satoshi, 経営学科

対象として一定のマーケットを持っていると思われる。



図 2 黄金博物館（金瓜石）技師宿舍（左）・宜蘭文学館（中）・宜蘭設治紀念館（右）（撮影：筆者）

2016年4月1日に台湾でもっとも有名な温泉地「新北投」（新北市）において伝統的な日本式木造建築構造の旧駅舎が復元された[2]（図1参照）。「台北市文化局、台北市文化基金会、台北都市交通システム（MRT）を運行する台北大衆捷運、北投の地元住民が、共同でオープニングイベント」を開催した[2]。1年後、台北市文化資産審議委員会によって歴史建築に登録され、さらに将来的にプラットホームや線路、機関車を再現する計画が発表されるなど[3]、観光資源としてさらに投資が続けられている。

このほかにも台湾の代表的な観光地九分近傍の金瓜石にある黄金博物館の日本技術者の家屋や、宜蘭県の宜蘭文学館・宜蘭設治紀念館など、精密に復元・保存された日本建築が、観光資源として生かされている（図2参照）。

2. 日本の古民家台湾移築事業

このように台湾では日本建築の復元・保存の意識が高く、資金が投じられ観光資源として生かされている。しかしそうはいつでも日本の古民家を復元可能なように解体し、海を越えて輸送、移築させるのは、大事業である。さらに歴史ある建築物ゆえに、手放す側の地元の理解を得ることも必要であり、また受け入れる先の新たな土地探しから、移築後の保存・活用といった持続的な経営手腕が求められる。気が遠くなるような難事業であるが、すでに移築・保存・運営まで行われたケースが一件、解体・輸送まで終わり、移築の準備が行われているものが一件ある。福井県おおい町の古民家が台北市の淡水区に移築された一滴水紀念館[4]と、岩手県西和賀町の古民家[5]ある。いずれも財団法人大河文化基金会理事長、邱明民氏の手腕によるものである。邱明民氏は台湾における日本建築の第一人者であり、先に紹介した新北投の駅舎の移築も彼の仕事である。財団法人大河文化基金会は木造建築の専門の基金会であり貴重な建築物の研究を目的としている。台湾のみならず中国も含め、20件以上の成果を上げている。

福井県おおい町、岩手県西和賀町の移築が行われた経緯を紹介したい。なおこの内容は2018年11月17日（土）本学中央キャンパスで行われた邱明民氏の講演[6]、ならびに2017年2月19日（日）に氏に取材させていただいた内容を基にしている。

福井県おおい町の古民家は、大正4年に水上勉の父、水上覚治氏が棟梁として建築したものである。地元では維持が困難となっていたものを、台湾に移築し保存する契機となったのは、阪神淡路大震災（1995年1月17日・マグネチュード7.3）、台湾集集大震災（1999年9月21日・マグネチュー

ド7.1・台湾中部)における日台のボランティアの交流である。阪神淡路大震災後、台湾のボランティアが現地で活動し、そして2000年夏から継続して神戸のボランティアグループが台湾の被災地で活動した。このボランティアグループが古民家移築事業を行っていたこと、邱明民氏が日台のボランティアの連携役であったことから、日本で維持が困難となっていた歴史ある古民家の台湾移築という壮大な計画が実行に移されることとなった。

2004年夏、28日間をかけ、日台ボランティアの手によって古民家が解体された。その後、4年間をかけ、台湾で受け入れ先を模索し、2008年、2009年と資材の点検・移築が行われた。この事業でのボランティア総数は1300名を超えた。この作業の過程は同行した映画監督により映像で記録され、その映像は一滴水記念館(図3参照)において人気を博している。

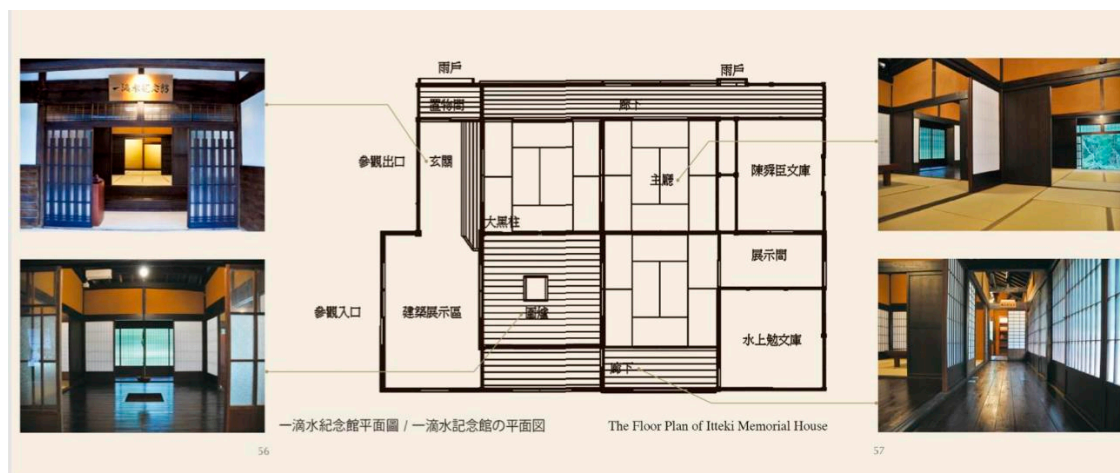


図3 一滴水記念館[6]

岩手西和賀町の古民家移築の契機も、奇しくもやはり震災であった。台湾集集大震災の被災地だった嘉義県の有志が東日本大震災(2011年3月11日・マグネチュード8.8)で被災した岩手県の中学生を、台湾に無料招待することを企画・実施した。この時の邱明民氏の大河文化基金会が中心となって活躍した。これを契機に大河文化基金会と地元とのつながりができ、移築の計画が始まった。

この古民家は明治35年に建築され、築113年であった。傷みが激しく維持が困難となっており、地元では保存か、解体か議論が分かれていた。邱明民氏が地元へ赴き、台湾での保存・維持、活用を提案し2014年9月10日から10月17日にかけて日本・台湾のボランティア200名によって解体作業が行われた。11月に大河文化基金会の倉庫に資材は運搬され、現在、移築先を模索中である。22m×12mにも及ぶ大きさで、移築後は、台湾最大の木造建築となる(図4参照)。解体に際しては、古民家の造りを図面のみならず3Dのコンピュータグラフィックで精密に記録されている。新潟の古民家の改築に際し、図面が起こされ記録されているが([7][8][9])、さらに3Dグラフィックとして記録することで、今後の改修時のみならず、日本建築の貴重な資料として、観覧者へのプレゼンテーションなどにも活用可能である。



図 4 岩手古民家図面[6]

3. 日本における古民家保存事例

新潟県には、常時公開されている地主遺構が 10 件ある。有名なものは北方文化博物館（伊藤家）・旧笹川邸・中野邸美術館などがあげられる[11]。しかしそれ以外にも基本的に非公開（年数回の公開を含む）のものが 42 件ある [10]。非公開のものは、現在、住宅として使用され、主に個人の努力で保存・維持管理されている。これらの中には個人では及ばない部分を、外部からサポートすることによって長く保存されるべき、貴重なものが少なくない。

本稿では 2008 年 6 月 28 日から 10 年以上にわたり、地域のボランティアで保存会を立ち上げた事例を紹介したい。新潟市西区の中原邸である。中原邸は幕末から庄屋を務めた中原家の、赤塚の歴史を語るうえで欠かせない豪農の館である[12]（図 5 参照）。

中原邸保存会は「中原邸を地域の文化財産として継承」することを目的に、中原邸ならびの関連する歴史を調査し、邸内を整備し、年 2 回の公開イベントを開催してきた[13]。さらに西区農政商工課による「北國街道まち歩き」に協力し、公開日とは別に参加者を邸内に案内している[14]。合計するとおよそ年間 1000 名程度の観覧者が訪問している。10 年前に有志 13 名で開始した保存会も、会員は県内外に及び、140 名を数えるほどに発展している。そして 2018 年に主屋を含む 5 ヶ所が国の登録有形文化財として指定された。また中原邸、ならびに残されていた書画・掛け軸などを記録し「赤塚郷ゆかりの文人集」（現在のところ全 3 巻）を編纂した。さらに 2018 年 10 月には邸内に資料館を開設

し、いままでの保存会のあゆみや文人集などによって掘り起された貴重な品の一部を公開している。



図 5 中原邸の門構えとボランティアの様子[13]

4. “姉妹古民家”の提案

台湾・日本の、地域のボランティアで支えられている古民家間で主催者・観覧者の相互交流によって、さらなる観覧者数増加・古民家の維持を目指す“姉妹古民家”を提案したい。台湾古民家移築事業、新潟市西区の中原邸保存会に共通しているのは、多くのボランティアによって支えられていること、そして建物のみならず、その歴史・文化を保存する意識である。これらの共通点を Granovetter (1973) の「弱い紐帯の強み」というキーワードで分析し、“姉妹古民家”の可能性を考察する。

台湾の古民家移築の事例では、震災ボランティアをとおして新たな交流が生まれ、そこから日本の古民家の台湾移築という、極めて斬新なアイデアが生まれている。中原邸において、公的な管理ではない非公開の邸宅というハンディを乗り越え、ボランティアを募り 10 年にわたり保存・維持してきたばかりでなく、保存会を発展させ、歴史を記録し、公開するなどクリエイティブな活動を繰り返し広げている。いずれも外部の「弱い紐帯」であるボランティアを迎え入れることによって、新しい着想を得て、実行に移している。図 6 は福井県おおい町（旧大飯町）の事例における人間関係の変化を記したものである[6]。震災のボランティアによって生じた「普通の友達」という「弱い紐帯」によって古民家解体・運搬・再建という事業が生まれて、外部の人間関係としての「パートナー」からお互いの組織の内部の存在として変化していったことがうかがえる。そして岩手県の事例をとおして、新たな弱い紐帯の強みを取り入れて、さらに新たな試みにチャレンジしている。現在では岩手の古民家を舞台とした映画撮影も計画されている。

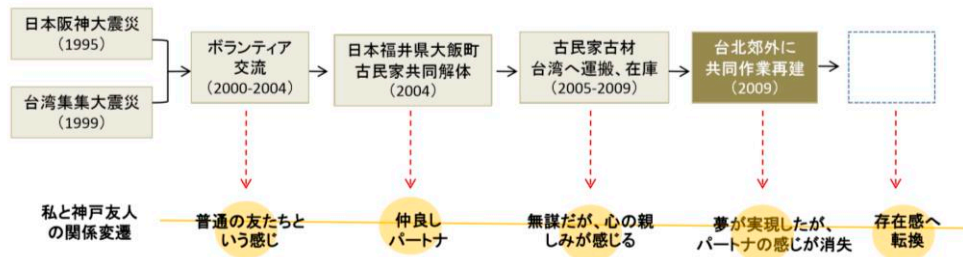


図 6 「なぜ日本の古民家が台湾に移築できたのか～日本建築再考～」関係変化[6]

台湾・新潟の事例とも、建築物の保存をとおして、その歴史・文化の継承を目指している。この歴史・文化が“物語性”といえるのだから、彼らの活動そのもの、すなわちボランティアが集まり、弱い紐帯の強みを生かし発想を広げていく様子も、次の歴史の足跡となり新たな“物語性”を生んでいくと考えられる。

これらの事例には“弱い紐帯の強み”を活用するという共通の物語性をもっており、そのためそこに惹かれ訪れる観覧者の興味関心も近いものであることが推測される。お互いの施設公開時に、両者の建物を広報することで、観覧者の交流が期待できる。台湾と新潟では距離があることが懸念される。しかし新潟空港と台湾桃園空港の間には直行便が就航し、さらに2018年から関西国際空港と新潟空港間でLCCが就航した。関西国際空港と台北桃園空港間は多数のLCCがすでに就航しており、新潟・台湾間はさらに“安近短”な往来が可能となった。また台湾からの訪日外国人数は2011年以降、増加の一途をたどっており2017年では年間456万人を超えている。台湾の人口を考慮すれば、かなりのリピーター率が想定され、今後、さらに関東圏や関西圏、九州、北海道などの主要な観光地以外にも足を延ばしてくることが考えられる。もちろん中原邸だけで新潟にインバウンドを誘致することは難しいと考えられるが、ほかの観光名所や他の地域と連携することで、相互に一助となることは十分に考えられる。例えば新発田市は新発田版DMO (Destination Management Organization) を立ち上げ、台湾をはじめとしたアジア各国のインバウンド誘致を実施している。

また主催者間で相互交流を行い、さらに弱い紐帯の強みを生かし、新たな発想による新規顧客の獲得することも考えられる。お互いの交流の映像コンテンツの作成や3Dグラフィックによる建物の構造の記録なども可能であろう。またボランティアの交流による施設の改修・再建は、相互にとって技術交流の場となることが期待される(図6参照)。

今回紹介した台湾の古民家移築事業、新潟の地主遺構保存の活動は、異なる視点を持ちながらも、お互いにボランティアという“弱い紐帯の強み”を活かして、歴史・文化を継承するという共通点があるため、交流の中で主催者・観覧者・ボランティアの間で価値観が共有され、いずれお互いの内部の存在となりえるのではないだろうか。“姉妹古民家”という草の根のつながりが、一時の流行ではない息の長いインバウンド誘致を実現すると考える。

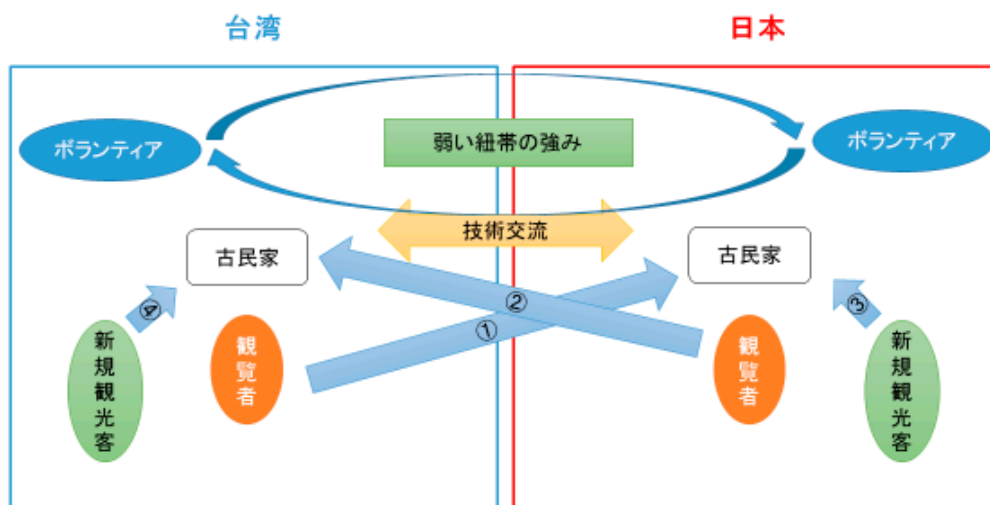


図 7 “姉妹古民家” の効果

謝辞

2018年11月17日（土）本学新潟中央キャンパスにて邱明民氏（財団法人大河文化基金会理事長）に、日本の古民家を台湾に移築し維持することがなぜ可能なのかについてご講演いただいた。この論文は、その講演ならびに筆者が台湾在外研究中（2017年2月19日）に邱明民氏の事務所にて取材させていただいた内容をまとめたものである。取材そして講演をお引き受けいただいた氏に感謝の意を表したい。

参考文献一覧

- [1] Granovetter, Mark, 1973, The Strength of Weak Ties, American Journal of Sociology, 78-6, pp1360-1380.
- [2] 台北市文化基金会, 新北投駅舎が里帰り一開業100年の歴史 温泉観光の先駆け, TAIPEI 夏季号 (取得日 2019年1月29日 <https://www.travel.taipei/ja/featured/details/11128>) 2017. 8.
- [3] 梁珮綺, 旧台鉄新北投駅、歴史建築に登録 “里帰り” から1年/台湾, フォーカス台湾 (取得日 2019年1月29日 <http://japan.cna.com.tw/news/atra/201804300005.aspx>) 2018. 4.
- [4] 財団法人大河文化基金会, (取得日 2019年1月28日 <https://www.facebook.com/kawa.org.tw/>)
- [5] 磯部美緒, 古民家が台湾でよみがえる。岩手県西和賀町の古民家移築とは, SUUMO ジャーナル (取得日 2019年1月28日 <https://news.goo.ne.jp/article/suumoj/trend/suumoj-74835.html>) 2014. 12.
- [6] 邱明民, なぜ日本の古民家が台湾に移築できたのか～日本建築再考～, 新潟国際情報大学 2018年

度国際理解講演会提示資料, 2018. 11.

- [7] 新潟市建築設計協同組合編著, 新潟市文化財旧小澤家住宅整備工事報告, 新潟市, 2011. 3.
- [8] マス都市建築研究所編, 旧齋藤家別邸整備工事報告書, 新潟市, 2012. 11.
- [9] 北方文化博物館編, 「伊藤邸に生きる日本建築の「貴重」を探る」事業報告書, 北方文化博物館, 2013. 3.
- [10] 久保安夫, 越後豪農めぐり 新装改訂, 新潟日報事業社, 2001. 12.
- [11] 第一印刷所クリエイティブインフォメーションセンター編, ニイガタ検定新潟市観光・文化検定公式テキストブック改訂版, 第一印刷所, 2007. 10.
- [12] 小宮山智志, 「赤塚」の魅力＝「まちづくり」, 赤塚郷ゆかりの文人展実行委員会『赤塚地域の魅力とお宝』2016. 12.
- [13] 齋藤敏夫, 中原邸保存会総会提示資料, 中原邸保存会のあゆみ, 2018. 6.
- [14] 飯田哲男, 写真で見る豪農の館・中原邸 北国街道まち歩き～史跡めぐりと白鳥ウォッチング～, 新潟市西区農政商工課, 2015. 11.
- [15] 日本政府観光局, 訪日外客数の動向, (取得日 2018年9月10日
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/)